

## 「人間よ、考えよ」の語りかけの意味

「『受精卵診断 男女産み分け』の報道に接して（バックナンバーマスコミ等コメント関係 P2004/02/05/「受精卵診断 男女産み分け」の報道に接して」：参照）の中で、ナチスの残虐行為を例にして「生命」に向き合うことにも触れたが、タイミングよくTVで「死の国の旋律・アウシュビッツと音楽家たち」の再放送を目にした。

番組内容は、アウシュビッツ強制収容所には収容者で構成される楽団があり、収容者を迎える時やガス室送りのカムフラージュ、ナチス党员向けの音楽を演奏し、見返りとしてガス室送りを免れた、元楽団員の解放後の人生の苦痛と苦悩の告白ドキュメンタリーであった。

元楽団員は、収容所で目にした一人の女性収容者の行為が強く印象に残っているようである。その女性は、収容所で他の婦人から産まれる乳児をナチスから殺すことを命じられても、拒む結果が何を意味するかを知らながらも拒み続け、いつ死ぬか、いつ殺されるかわからない乳児に、この世に産まれて来たのだからせめて一度でもお風呂に入れて上げたいと、収容所内の遠い距離を重たいバケツで一人で水を何度も運んでいたという。自分は命が助かりたいがために楽団員となったが、この女性は命を引き替えてまで、乳児の命を愛おしんだ行為とのギャブ……。

あの極限状況の中であっても「生命」を愛おしみ、人間としての自らの尊厳を守り通した彼女の姿を目にしただけに、元楽団員はガス室に送られた同胞への想いに日々苛まされていたようである。解放後の人生では「アウシュビッツ」での体験のことを極力話題にせず避けていたが、かなり高齢になってからアウシュビッツを訪ね、同胞へ自らを謝罪をすることにより、ようやく少しは自らの心の解放を得たようである。

番組の最後に、元楽団員は、「アウシュビッツは今も『人間よ、考えよ』と語りかけている」とつぶやいていた。

ネットで「アウシュビッツ」で検索すると、たくさんのサイトで写真等を目にすることができます。写真等を見ながら今一度、「人間よ、考えよ」の語りかけの意味を、推考してはいかがでしょうか。

以下は、映画「夜と霧」の最後の字幕の言葉とか……。

遠ざかる映像の前で  
希望が回復したふりをする  
ある国のある時期の話と語り聞かせ  
絶え間ない悲鳴に 耳を貸さぬ我々がいる

（2004年02月08日 記）